１７歳・小林真由美

田中朝子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１７歳・小林真由美

【Ｎコード】
Ｎ５５４５Ａ

【作者名】
田中朝子

【あらすじ】
女子高生・小林真由美が出会った、ちょっぴり刺激的なアルバイト！違法カジノバーでディーラーとなり、金と欲にまみれた世界に入る。さて、その後の真由美は？女子高生とリアル裏社会がディープに交じり合う！！！！！

【第1話】　～出会い～

「まぁまぁ～かなぁー。別に。」

小林真由美１７歳の高校生活の感想だ。
「別に。」ってところが女子高生らしい。
友達も少なくないし、マックのバイトも楽しいし、テキトーに好きな彼氏もいる。
親は金持ちではないが東京下町でもんじゃ屋を営んでいて、どちらかと言えば仲の良い家族だ。
不自由のある生活ではないのは確かだったから「別に。」なのだ。
都立高校で2年生の夏休み。
下町の古い一軒家で、真由美が生まれる前から夏冬かまわず居間にあるおコタに入り、定休日の両親とお夕飯をしていると
「最近どう？」と、新橋の立ち飲み屋で、久々に会った常連客に聞くかのように、母が娘に聞いたのだ。良く言えばフレンドリーか。
友達感覚親子。
その時は自分の言った
「別に。」に、深い意味なんて考えてないし意味があるとも思っていなかった。
そんな質問よりも〈お父さんのくしゃみうるさいなぁー〉と思っていた。

夏休み特番にも飽きてゴロゴロしながら折込チラシを見ていた。新聞は読まないチラシ専門だ。
順番に見ていってると、こんな求人広告がスッと真由美に滑り込んできた。

【カジノＢａｒ　リトルリノ☆

ディーラー・ウェイトレス大募集！！！未経験者可。丁寧に教えます！】

〈ん…？〉
テレビの旅番組にでてくる、ゴージャスなラスベガスを思い浮かべたが、なんか違う。
〈日本にもあるんだぁー〉
と不思議に思って、パチンコ好きなお父さんに聞いたみることにした。

「ねぇー、お父さんさぁー…」
「うん？」
「…やっぱなんでもない。」
「なんだよぉー気持ち悪いなぁー。」
「マジなんでもないって！ごめんごめん。」
ニコっと笑って誤魔化すのは真由美の得意技だ。つられて父親もニッコリ。

それは直感だった。親に聞いては、話してはいけないと真由美の第六感が働いた。

次の瞬間〈バイト今月で辞めれるかな…〉

《ただの夏休み》が《ドキドキと妄想を膨らませる》時間に変わったのは、求人広告を見てから2分もかからなかった。
バイト仲間とも海やスノボー行ったりして楽しいけど、辞めるのが寂しいなんで思いもしなかった。
ただ、皆と一緒はツマンナイと思っていただけなのだ。友達と違うことがしてみたい。
親にバレないようにソッとチラシを隠し持ち、♪Ｍａｙｕｍｉるー

む♪とドアにデコレーションしている自室へ戻った。
♪Ｍａｙｕｍｉるーむ♪のある二階へギシッキュッギシッキュッと上りながら、ニヤニヤしていたのはあえて言う必要もないだろう。
すぐにジックリと読みたかった真由美は、二階へ上りきった途端薄暗い廊下一番奥の♪Ｍａｙｕｍｉるーむ♪までダッシュした。
走るのが超嫌いな真由美にとって、ダッシュするくらいの感情なんてすごい事なのだ。

バイトの履歴書長所欄に“独り言でスッキリできる事”と書く真由美は部屋に入って長所を活かし始めた。
しゃべらないと自問自答できないタイプなのかもしれない。
「ディーラーってカッコよくない？マックの制服ダサくてヤなんだよねぇ。“てりたま”は好きだけど。」
ウェイトレスじゃなくディーラーに惹かれていたらしい。
「未経験者可かぁー。未経験で時給１５００円！？超ぉーヤバくない？倍じゃん！！キャバでもないのに。
うぅー、１８歳以上からかぁー。って言うか高校生不可じゃん。マジでぇー。。。バレるかな…。
…イケんじゃん？全然ハタチとか言われるしお姉ちゃんの保険証使えるし。やばぁーい！楽しそげ！
…“カジノＢａｒ　リトルリノ☆”か…」

カジノバーはゲームセンターではない。違法賭博場だ。
ガサいれ対策に表向きはゲームセンター感覚をアピールしているが換金していないカジノバーは都内に数百件あった中の数件だろう。
アングラとよばれる、女子高生でなくても想像しがたい裏社会とリアル社会との社交場。
カジノバーまでが、ぎりぎりリアル社会ともつながっている終着駅だ。
さて、その向こう側は？

そう、実はついさっき真由美がダッシュした廊下は、♪Ｍａｙｕｍｉるーむ♪ではなく
“　欲望を狂わし大きなパワーを増幅させる【現ナマ】を、キラキラ魅力的で掴めない【虚偽】で覆った場所　”
につづく廊下だったのだ。ただし、誰も気付きはしなかったし知る由もなかった。
一階の居間にいた両親も、テキトーに好きな彼氏も、真由美自身も。

「お電話ありがとうございます“カジノＢａｒ　リトルリノ”です」
オジサンの声だ。女子高生の真由美は声だけじゃ年齢まではわからない。
真由美にとって、同世代以外の男子はすべてオジサンだ。
「あのー、チラシ見て電話したんですけどぉ…。面接大丈夫ですか？」
電話で年齢はバレないと思いつつも、びくびくと話しだした。
「あー、ハイハイ。バイト希望ね。顔に自信あるなら面接来て」
「はっ？？？　…ディーラーって顔関係あるんですか？」
「ん？　ウェイトレスじゃなくてディーラー希望なの？
あははっゴメンね！女の子だったからウェイトレス希望かと思ったよ。」
「ディーラーの方です…けど…。」
「じゃあ、明日の５時にこれる？場所わかんなかったら電話して。
私、店長の渡辺って言いますから。」
ガチャン、ツーツー…。
特段に顔に自信のあった真由美ではなかったが、いきなりブスお断りと言われるとカチンときた。
１７歳の女子高生でなくとも女なら当然だ。

普段の真由美ならばたとえ勘違いでも、自分がブスだと決め付けられた気がして
電話を切るところだが、ディーラーというバイトへの興味が勝っていたので我慢した。
ただ一言「店長ぉー？頭悪い奴だなぁー。ジジイってやっぱ無理。」

早速、明日の面接の準備を始めた。幸いなことに姉は帰ってきていない。
さぁ、今だ。姉の部屋へ入り、保険証と大人っぽいキャミソールとシャネルの小さなカバンをこっそり拝借した。
今日ほど姉の存在に感謝した日はなかったはずだ。
「お姉ちゃんの干支ってなんだっけ…。」
そう考え出して指で数えだした時には、店長の渡辺の言葉など忘れていた。

２３時ごろ、真由美の携帯が鳴る。親友の優希からのメール着信音だ。
@ちゅーす！真由美、明日バイト？渋谷行かない？
@ごめぇーん。明日出かけるんだ。
@彼氏ぃ？
@うーん…バイト仲間とね、池袋。

あえて言わなかった。優希は化粧が濃いわりには真面目な性格だからカジノなんて
言ったら絶対に反対されるはずだ。ちょっぴり心は痛んだが、しばらくして
から言えばいいやと判断した。真由美だけの秘め事だ。
かなりワクワクしていたから寝付けないのは承知していたが、ベッドに潜り込みたくなった。

タオルケットに一人、体を丸めてじっとした。

ガチャっ…。

リトルリノのドアを開いた真由美は、小さなシャネルのカバンをしっかりと握り締めて顔を強張らせた。

強烈なタバコと柑橘系の匂いがわからないほどの緊張だった。

〈真由美、大丈夫だよ〉

そう自分に言い聞かせて、誰も出てこない店内へ入っていった。

ゆっくりゆっくりと。

悪趣味な絨毯のおかげで足音はたたない。

―　真由美本当にいいの？戻って真由美。　―

店内エントランスにある金ピカの狐の置物は、そう真由美に語りかけていたのに…今ならまだ、間に合ったのに…。

真由美は至極当然のごとく“リトルリノ”に吸い込まれていった。

【第2話】　～高鳴り～

「ダレ？」
〈ヒャッ！！！！？？？？〉

店内へ入った真由美の後ろから、気配無く男の低い声が追いかけてきた。パッと後を振り向くと、東南アジア系で長身のゴツイ男が真由美を見下ろしている。
「メッ。め。。。面接に来たんですけど。。。」
〈怖っ！誰コイツ？えー！いきなり外人！？〉
真由美の心臓は、苦手な短距離とスクワットを交互にやりながら１０００m無呼吸で駆け抜けた後くらいバックバクだ！
「アソ、コッチダヨ。」
流暢とはいえない日本語だが、面接者とわかると薄っすら微笑んだ。ゴツイ身体に白い歯が目立つ。
〈まったく驚かせんなよっ…〉
心では強気に思いながらも、まだバクバクビクビクしながら大人しく男の後を着いていった。奥へ奥へ。
店内にはルーレットや緑色のテーブルが沢山あった。
テーブルの大きさは様々で、真由美にはなにがなんだか。
一番大きなテーブルにトランプをバラバラといじりながら若い男が座っている。

「テンチョ、メンセツノコヨ。」
〈店長って、あの渡辺？あれ？若くない？〉
「こんにちは、どうぞ座って。」
「シツレイします。」
真由美がジジィと思った渡辺は実際にはジジィではなく、真由美からみると２５歳位だろうか。

申し訳なさそうなアゴヒゲに、やや細身で色白だ。目は細くまつ毛が長くて女装したら似合いそう。
「失礼ですけど、店長って若いんですね…。」
さっきまで、心臓バックバクの小娘が吐くセリフとは思えない。根性のある子だ。
「あははっ！本当に失礼だね！言うじゃないっ。やるなぁー。君も若いね！はははっ！」
「１９歳です。」
「俺の事、オジサマだと思ってたわけね！？んーオジサマの年じゃないけど、ＯＫ！いいよぉー！ウケルから合格！明日からおいでっ。」
たった３０秒の面接で採用だ。
〈オジサマじゃなくて“ジジィ”だし。干支とか聞かないの？身分証明書は？履歴書は？採用ぉーー？マックより簡単じゃんかっ！〉
あまりに簡単すぎて真由美のほうが不安になった。
「そんなんで良いんですか？私、ディーラーとかあんまり、って言うか全然意味わかってないんですけど…。」
「大丈夫だよ教えるから。ただ、制服はミニスカートなんだけど、脚出せる？出せれば合格でいいよ。」
脚には自信あり。問題なし。
「ミニでも大丈夫です。」
「あそ、サイズは？７号？９号？明日までに用意しとくから。」
「じゃぁ、９号で…。」

「おはようぉーございまぁーす！」
能天気な女の声が聞こえた。くるっと振り向き声のするほうを見ると、長身の女性がいた。
シャンプーのＣＭに出演できそうな漆黒のストレートロングと、細長い脚、大きな目に大量のマスカラと、ぷるっとしたエロい唇を、これでもかと言わんばかりにアピールしながらディーラーの制服を

着こなしている。
真由美よりはずっとお姉さんに見える。
近づいてきた。
〈うわぁーイイ女だなぁー〉
到底、女子高生には出ないエロ気の持ち主に真由美は気持ちよく完敗だ。彼氏には、真由美ってなんかエロいよね。なんて言われて自信はあったが次元が違った。
「はじめましてぇー！新しい子？ウェイトレスさん？宜しくね！シャネル可愛いね！」
「ウェイトレスじゃなくてディーラー志望だよ未経験だけど。仲良くしてやって。」
渡辺がボソッと言った。さっきまではゲラゲラ笑っていたのに、やけに大人しい。
「はじめまして、小林っていいます。」
「どぉーも！亜矢子でぇーす。アヤって呼んでね！ディーラーの女の子はうちらだけだから宜しく！」
「あ、はい宜しくお願いします！」
そう挨拶すると亜矢子はルーレット台へ向かった。どうやら亜矢子もディーラー成り立てで練習しているらしい。何度かルーレットの玉を場外へぶっとばしていたから真由美でも初心者だと見てわかった。
〈良かった。他にも素人いるんじゃん！〉
「じゃ、明日の5時から出勤ねっ！すね毛剃ってきてね。ははっ。」

「すね毛ありませんから。」
〈やっぱジジィだなコイツっ！ふんっ！〉
「あ、名前なんていうの？」
「小林真由美です。」
「真由美ちゃんねっ！じゃ、よろしくどぉーぞ！」

名前とすね毛の確認だけでさっくりと面接が終了し、こんなんで本当にいいのかと思いながらエントランスへ向かうと他のディーラー達が出勤してきた。
5〜6人ほど、年齢はバラバラだ。
「こんにちわぁー♪」
「こっんちはぁ〜」
「こんわんばんこぉー」
「はろぉー！」
「ぐっもーにんハニー！」
「おっーす！」
軽薄声でディーラー達が挨拶してきた。
「こ、んにちワ…。」
あまりの軽薄さに、いくら明日から先輩になるとはいえ媚びたくなかった真由美。
〈ここのディーラーってみんな変！芸人かよっ！ディーラーってさ、カッコイイイメージじゃないの？〉

エントランスを出ようとして、遠くで軽薄ディーラー達の声がまだ聞こえてた。
「だれ、あのコ？」
「知らねぇー。新しいウェイトレスじゃん？」
「けっこう可愛いじゃん！」
〈ふふっ、見る目あんじゃん〉
「えー、68点かなぁー。」
「卓、厳しいっ！！」
〈68点！？　卓って奴許さねぇー！お前は12点だっつーの！〉
ようやくドアを出る時、ひどいタバコの匂いと、高級なのか安っぽいのかわからない柑橘系の香りが真由美を送り出した。いつもならタバコの匂いを毛嫌いする真由美だが、不思議とイヤな気分ではなかった。

「しっかし、暑いなぁー。。。」
夏休み中なのだから、くそ暑いに決まってる。夕方といえど体温よりもあきからに高い。ジリジリと真由美の肌に突き刺さって、さらにアスファルトから照り返しこれでもかと攻撃してくる。
こっそり拝借した姉の大人っぽいキャミソールも、汗で透けそうになるほどの暑さだ。いつもなら真夏でも透けそうなキャミなんてめったに着ない真由美だが、今日ばかりは亜矢子の影響だろうか
〈もうちょっとセクシー路線にすれば良かったかな〉
なんて調子に乗っていた。とりあえず面接には受かった。その位の余裕はもうあったのだ。

「おかえりぃー。」
もんじゃ屋の実家へ戻ると、珍しく姉の尚子が早く帰っていた。
扇風機の真ん前に陣取り、
「あれ、ちょっとぉー、あたしのキャミ着ないでよねっ！あっ、シャネルも！」
「ごめぇーん！ちょっとデートでさっ！許せっ！」
「えぇー？真由美の彼氏、ブランドとか嫌いって言ってたじゃん。彼氏変わった？」
「んー？うーん、別に別れてないけど・・・。」
「とにかく、ちゃんとキャミはクリーニングしてから返してよね！今日、メイク濃くない？」
「ふぁぁーい・・・。」
〈あぶなぁーい！なに早く帰ってきてんの？こんな日に限って。尚子こそ彼氏にフラれたんじゃないの？ま、いいけどね。〉
メイク濃くない？の答えはスルーして、尚子が二階へ上がってこないうちに保険証とシャネルを返した。保険証はさすがにヤバイからだ。言い訳が難しい。

メイクを落として、お気に入りのアロマを準備しリラックスしようとしたが、頭の中はリトルリノでいっぱいだった。
「店長ってあんな若くて出来るんだぁ。ってか亜矢子さんていくつぅー？尚子よりも上？メイク超いけてた！あのグロスどこのだろう・・・。つーか！卓って奴、マジむかつく！明日ぜったい誰か確かめてやるっ！」

真由美・・・。そんな事ばっかりかよ。
明日からはじまっちゃうんだよ？“リトルリノ真由美”が生まれちゃうんだぜっ！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5545a/

１７歳・小林真由美

2010年10月28日08時17分発行